

文化・芸術

名画の扉

大川美術館特集展示から

もえ出る青緑が込み上げてきます。平たくれます。それを俯太く黒い線を並べ構成した有楽町駅附近（1936年1月）から、1年半後の作品です。

36年2月、俊介は結婚し下落合にアトリエ兼住居を構えます。俊介の住まいのある小高い丘の一帯は、洋風な新しい家々がたち並ぶ住宅地でした。緑の深さとモダンな建物とが重なり合い同居する場所、それこそが俊介が暮らした郊外でした。

本作では、中央の白壁の建物、両脇に大きくゆるやかに伸びあがる木立に包まれて犬と

（小此木）

遊ぶ子どもたちが描かれています。それを俯瞰（ふかん）する目線には、この時の俊介自身の心象もまた投影されているように思えてなりません。本作が描かれた頃37年の4月、俊介は長男・晉を「くして」います。

ところで、本作に目をこらせば「S.M.A TUMOTO」というサインが画面の対角線上2カ所に記されています。大小のサインがなにを物語っているのか、つぶやきを漂わせる一

松本俊介（1912～48年）

1937年8月、油彩、板
97.0cm×130.0cm
(宮城県美術館蔵)

